

# 『古今偽書考』補説

村山吉廣

## 姚際恆の登場

姚際恆の名を顯著にしたのは顧頡剛である。「古史辨」創刊當時、彼は胡適との往復書簡の形式で姚際恆の著述と生涯について多くの情報を提供して世人の注意を喚起した。姚際恆の著述のうちで、すでに刊本のあった『古今偽書考』と『詩經通論』にはいち早く顧氏による標點本が出された。こうして近年に入って姚際恆に對する関心もようやく高まったが、その學術の評価については議論も多く、むしろ顧頡剛の孤軍奮闘の感さえある。

「東方學」第六十二輯に載せられた平岡武夫氏の報告によると、晩年の顧頡剛は『姚際恆遺書彙輯』の計畫を進めていたようである。同氏によればその學術についての評価も次の

ようになっていた。

姚氏は清初の最も批判精神に富む學者である。傳統思想に束縛されることを肯んじなかつたために、正統派の壓迫を受け、彼の『九經通論』と筆記とはすべて刊行することができなかつた。彼の一百數十卷の大著作は、その名が彼に同情を表明した杭世駿の編集する『浙江通志』にわずかに見えているにすぎない。その中のものでは『詩經通論』の一種がかつて四川で印刷されたほかは、すべて散佚してしまつてゐる。

顧氏のこの姚際恆に對する評價は「古史辨」創刊のころと少しも變つていない。

ついでに記しておくとして顧氏の『姚際恆遺書彙輯』は次の五種を内容とする豫定であつたという。

(一)九經通論 (二)古今僞書考 (三)庸言錄

(四)好古堂書目 (五)好古堂書畫記

このうち、主著と目されるのは『九經通論』であり、以下四種を顧氏は「雜著」と題している。『九經通論』はもと「易傳」「古文尚書」「詩經」「春秋」「周禮」「儀禮」「禮記」「論語」「孟子」の各通論から成り、『浙江通志』の經籍門には百七十卷あったとされているが、散佚を免れたのは『詩經通論』だけである。

顧氏はこのうち『古文尚書通論』については閻若璩の『尚書古文疏證』からの輯佚を考え、『禮記通論』については杭世駿の『續禮記集說』からの拾遺を企てている。『儀禮通論』については次のように言う。

私は前に杭州の崔永安の家に藏する姚氏の寫定本を借りて全部を寫した。まもなく北京大學の馬裕藻教授に借りてゆかれた。抗日戰爭中に馬氏は逝去し、遺書がその子の擁から北京大學圖書館に寄贈された。しかし今のところ北大圖書館善本書目を調べても見當らない。ひきつづいて探す。崔家の藏書の方はすでに全部を日本軍に持ってゆかれた。將來に日本の書目の中に見つかって研究院から交渉してもらって寫本を作ることになるかも知れない。

『古今僞書考』補說(村山)

『儀禮通論』の行方はどうなっているのであろうか。顧氏の望んでいるように、本邦の書目中出现して里歸りの日を迎えることができれば幸いである。

いま一つ『春秋通論』には北京圖書館に殘本五冊がある。顧氏はこれに標點を加えて付印の豫定を立てていたようである。以上舉げた五種以外の「易傳」「周禮」「論語」「孟子」の四種は顧氏もこれを亡佚と定めている。

雜著の部のうち、『庸言錄』と『好古堂書目』の二書は未刊であるが、後者には南京圖書館に完全な寫本があり、刊行には問題がない。『庸言錄』については次のように記す。

原書は未刊である。ただし清代中期には杭州において流傳していた。孫志祖の『讀書脞錄』、梁章鉅の『浪跡叢談』などに引かれているのでそのことがわかる。近ごろは亡くなつてしまつたようである。今日では『四庫提要』およびその他の書物に引かれているものを集めて、おおよそを見ることができると。また『毛奇齡集』『西河詩話』にも姚氏のことについて説き及んでいるので補充に役立つ。

顧氏の『彙輯』計畫の次第からもわかるように姚際恆の著述はその過半を失っている。その原因は何であるか。顧氏はこれをさきにも記したように、姚氏は清初にあって最も批判

精神に富む學者であり「傳統思想に束縛されることを肯んじなかつたため」だと斷定している。この顧氏の斷定は主として『四庫提要』の姚氏に對する批難を不當とするところから發している。『提要』卷百二十九雜家類存目六は姚氏の『庸言錄』を録しその學風について次のように述べている。

際恆は國朝初に生れ、多く諸著宿に従ひて遊ぶ。故に往々その緒論を剽む。その經を説くや、圖書の僞を闢くがごときは、則ち之を黃宗羲に本き、古文尙書の僞を闢くは、則ち之を閻若璩に本く。周禮の僞を闢くは、則ち之を萬斯同に本き、小學の書數たるを論ずるは、則ち之を毛奇齡に本く。而して持論いよいよ恣肆を加ふ。歐陽修、趙汝楨の説を祖として、周易十翼を以つて僞書となすに至りては、則ち尤も横なり。

この批難に對して顧氏は『古今僞書考』標點本の序で次のように辨護している。

姚際恆がもし當時の各家の説を採つて書を著したとしたら、それは彼の「善に従ひ義に服す」という「公心」から出たものであり、罪とするには當らない。私の判斷するところでは、彼は「時代精神」に則り、黃・閻・萬・毛らと方向を同くする努力をし、自らの研究能力を十分に發揮し

たのであり他人の説をかすめ取つたなどというには當らない。

そうしてさらに「彼の著書は、黒と白とを別けて一尊に定める」という四庫館の「痛斥」するところとなつたため、世人もおのずから彼の著書をかえりみなくなつたのだ」という錢玄同の説を擧げてこれに同意している。

ところで疑古派の鬪將であつた顧頡剛にこれほどまでに姚際恆に傾倒させる端緒となつたものは『古今僞書考』である。前掲『古今僞書考』標點本の序のなかで顧氏は次のように述懐している。

二十歳以前に私が受けた學術上の大きな衝撃には二つある。一つは『先正事略』のなかの「閻若璩傳」を讀んだことであり、いま一つは『古今僞書考』を讀んだことである。私はこの二つの衝撃が私の畢生の研究の方向を決定的に運命づけたものと信じている。

この書は顧氏も指摘するように姚氏の主著ではなく、へんべんたる雜著にすぎない。しかし顧氏の述懐は近年における姚際恆の學界への再登場がまずこの書の存在したことによつてもたらされたことを物語っている。そもそも現在、『古今僞書考』は學術史上にどのような位置づけをなされるべき書

なのであろうか。

### 『古今僞書考』の性格

吳振棫の『杭郡詩輯』は姚際恆のいくつかの詩を收め、その序言で簡略に姚氏の傳を綴っている。そのなかでその著述について次のように言う。

年五十、遂に人事を屏け、十四年にして書成る。名づけて九經通論と曰ふ。凡そ一百六十三卷（『浙江通志』はこれを百七十卷とする。筆者注）。又た庸言錄若干卷を著し、經史諸子を雜論し、末に古今僞書考を附す。持論極めて嚴覈なり。

これによると『古今僞書考』（以下僞書考とする）は『庸言錄』に附録された書として世に出たように思われる。しかし、經史諸子を雜論したのが『庸言錄』なのか僞書考なのか、やや判然としない。同時に持論の嚴覈なのが主としてどちらの書を指しているのかも同様である。なお『杭州府志』儒林傳（光緒年間刊）に收めた姚際恆の傳に引く『武林道古錄』のこの條の最後の一文は「持論嚴に過ぐと雖も、以って惑を破るに足る。學者之を稱す」となっている。

今日われわれの手にする版本は鮑廷博の『知不足齋叢書』

『古今僞書考』補説（村山）

に收められたものから出ている。鮑氏は徽州の人で杭州に住んでおり姚氏とは同郷の関係にある。顧氏も鮑氏がそうした縁故に依り僞書考を『庸言錄』から「析出」してその叢書に收めたものと解釋している。

僞書考にはその後、光緒十八年刊の浙江書局單行本があるが、顧氏はこのテキストを「板本甚だ劣り譌謬繁しとなす」と言っている。顧氏標點本は一九一四年に成り、のちこれは一九三〇年に『古籍考辨叢刊』に收められた。テキストとしては他に金受甲の『古今僞書考考釋』（民國十三年刊）や餘姚の黃雲眉の『古今僞書考補證』（民國二十年序刊）等がある。わが國では文政五年刊の官版本に『古今僞書考』があり、江戸の讀書人には比較的によく親しまれた書であったようである。

なお、姚氏の雜著の一つである『好古堂書畫記』は顧修の『讀畫齋叢書』の收めるところであるが、この書についても文化五年刊の和刻本上下二冊（筆者架蔵）がある。

僞書考の成立年代は未詳である。ただ『庸言錄』については、姚氏が『詩經通論』のなかで「これ予の昔時の庸言錄中の語なり」（衛風淇奥の條）と記しているのです、この書は姚氏早期の著作で、姚氏が五十歳以後にとりかかったと傳えら

れる『九經通論』成立以前のものともみなされる。

しかし、僞書考のなかでは例えば「易傳」の條に「予に別に易傳通論六卷あり、ここに亦た詳らかにせず」とあり、また「孝經」の條には「予、通論を著はして九經に止る。その別僞類は孝經に及ばず」とあるので、僞書考は『九經通論』成立以後の比較的晩年の作であることがわかる。したがって僞書考は『庸言録』の「末に附された」とされているものの、それは「經史諸子を雜論した」という兩者の内容の共通性によるものであって、決して互に近い時期の作ではないことを明らかにしておきたい。

思うに僞書考は姚氏の九經研究の業餘に出來したものであろう。恐らく姚氏は九經研究のかたわら関連資料の吟味を不可缺としたと考えられる。例えば僞書考のとりあげている易傳、詩序、竹書紀年、國語等の眞僞の吟味がそれであろう。僞書考はこうした「經史」の雜論を骨子として他に「諸子」に對する辨僞を附して一本とされたと考えられる。

僞書考の「小叙」ではそのことを明らかにしてはしていないが、著述の動機については

眞僞、辨ずるなくんば、尙ほこれを讀書と謂ふべけんや。是れ必ず取りて明らかに之を辨ずるは、此れ讀書の

### 第一義なり。

と述べている。現存する『詩經通論』のなかでも「原詩の眞面目を存する」ことに努力が傾けられており、「眞僞の辨別」が姚氏の學問の出發點であつたことは十分に知られる。

本來「訓詁の學」こそは、「眞僞の辨別」すなわち「辨僞の學」のはじまりと考えられるが、一般には「書物の眞僞」に則してその名稱が用いられる。そこで從來僞書考は、胡應麟の『四部正譌』、宋濂の『諸子辨』、高似孫の『子略』等の後を繼ぐものとみなされている。事實、姚氏の小叙も「明の宋濂に諸子辨あり。予は經、史、子を合して之を辨ず」と記しており、この關係は否定できない。ちなみに僞書考のなかで所引の多いものは、上記三書と陳氏の『直齋書錄解題』、晁氏の『郡齋讀書志』とである。

黃雲眉の『古今僞書考補證』はこうした觀點から僞書考に評價を下して次のように言う。

姚首源氏の古今僞書考は一の淺薄の辨僞書なり。その大槪を尋ぬれば、通考、諸子辨、筆叢等の言ふ所を抄撮し、排比して書を成し、舛駁を分類し取舍意に隨ふにあらざるはなし。而して叱辱を之れ加ふるも又た往々にして情理の安んずるところに準ぜず。けだし、詳覈なるは宋・胡に遜

り、而して武斷は則ち之に過ぐ。此れ以つて作偽者の心を服せしむるに足らず(序)

黄雲眉の偽書考に對する評價はこのように低いものである。姚氏の學問の理解者である顧頡剛さえもその辨偽の精神は高く評價するけれども、その論斷の方法に關しては、

その病に二あり、一は文辭の工拙を以つて眞偽を定む。

故に文(中子)、列(子)を眞となし而して鵠冠(子)、公孫(龍子)を僞となす。一は則ち後世の著述の成法を以つて古籍を樂括す。故に黃帝素問、神農本草、晏子春秋、みな偽書に入る。姚君そもそも亦た未だ深思せざるか。昔人の筆記に謂ふ、君の孝經を抨撃すること殆んど過激なりと。予は謂ふ、この考中、最も精しきの言は、孝經の條にしくはなし、他條は皆な人の説に依附して發明すること鮮しと(『古今偽書考』跋)

と記して意に滿たない點の少くないことを示している。

たしかに右の兩氏の見解の通り、姚際恆の論斷には武斷と思われるものもあり、考證は必ずしも精緻ではない。

しかし『古今偽書考』は主著の『九經通論』と表裏をなして、その傳統思想に對する果敢な批判に特質があり、考證の精緻は必ずしも彼の所期するものでなかつたことも指摘して

おかなければならない。そこで次に『古今偽書考』の辨偽と先行する同類のいくつかの書との相違について少しく記しておきたい。

### 眞偽辨別の精神

偽書考の成立に先行する宋濂の『諸子辨』や高似孫の『子略』と偽書考とをくらべてみると、形式上では前二書がその名のごとくもっぱら子類を辨偽の對象としているのに對し、偽書考は經類・史類にまで範圍を擴げているというちがいがあ

る。ただ胡應麟の『四部正譌』は經類を對象としている點で偽書考の先蹤をなすが、ここで注意しなくてはならないのは同じく經類と言うものの胡氏の對象としたものは、『連山易』『三墳』『儀禮』『逸禮』などのいわゆる雜經にすぎないことである。もちろん偽書考でとりあげられているものも大半は『子夏易傳』『易乾鑿度』『忠經』『家禮儀節』などで、同じく雜經であるが、これは主要な經典がすでに『九經通論』で検討の對象となつてゐるからである。しかし偽書考にはさらに『易傳』『詩序』『孝經』『爾雅』などがとりあげられていて、前者とあきらかに質的なちがいが認められる。

ここでその辨偽の特質を知るために『孝經』の條の記述をたどつてみたい。この條はさきにも引用したように前人がこれを「過激」であると批難し、顧氏が「最も精し」と稱揚した條である。

姚氏はまず漢志及び隋志の記載をふまえて「是の書の來歴は漢儒より出づ。ただに孔子の作に非ざるのみならず、併せて周秦の言にあらざ」と言う。

次に論據として擧げているのは、三才章の「夫孝天之經」から「因地之義」までの文が『左傳』の「子太叔述子産」の言を襲い、ただこのうちの「禮」の字を「孝」に變えただけであることと、聖治章の「以順則逆」から「凶德」までの文が『左傳』の「季文子對魯宣公」の言を襲い、「君子則不然」以下が同じく『左傳』の「北宮文子論儀」の言を、事君章の「進德盡忠」の二語が「士貞子諫晉景公」の言を襲つたものだということである。

姚氏は『左傳』の成立を「張禹傳ふる所よりしてのち始めて漸く世に行はる」と考えており、従つて『孝經』は「その時人の爲るところ」と判断するのである。またその文義を検討するとそれが、甚しく「戴記中の諸篇」と似ていることからも、この書が漢儒の作とみなされると主張する。そうして

世にある「孔子の作るところ」という説のごときは「もとより必ずしも辨ざるに足らず」と述べている。

これはすべての典籍に對して因襲を排除して史的位置づけを行おうとする試みであり、單なる目錄學的處理とは大いに異なる態度である。

また諫争章の「子不可不爭於父」の條については「又た何ぞその徑直なる、且に激に傷かんとす。その言、はなはだ倫類せず」と言い、むしろ『孟子』の「父子の間は善を責めず」の文中にこそ「深く天理人情に合するの言」があり、諫争章の語を孔子の言とすれば、孟子のこの言とのへだたりはどう解すべきかと疑問を投じている。これは彼の漢儒の教説が孔子や孟子の教えと背馳するものだという不信感の表明であり、同時に姚氏が孔孟の言は「天理人情」に合するものだと考えていたことを物語っている。

朱子が『孝經刊誤』を作つたことについても「疑信相參り妄りに意を以つて經と傳とを分ち、皆な附會牽合す。その牽合する能はざるものは則ち曰く、これ經を解せず、別に一義を發すと、笑ふべきなり」と難じている。

このように漢儒にも朱子にもひとしく批判の矢を放つてい

んじゃない」姚際恆の眞面目のあらわれである。

次にいま一つ「詩序」に對する僞書考の所説を擧げることにする。

姚氏は『後漢書』儒林傳の「初、九江謝曼卿善毛詩。(衛宏從受學、作毛詩序)の記事により、「詩序」は後漢の衛宏の作と定める。「鄭詩譜」が「大序は子夏の作」としていることに關しては、孔子に「子を起す者は商なり」の一語あることに依據したものであり、これは「明らかに附會に係る。絶えて信すべからず」と斥けている。姚氏の見解は詩序の冒頭の一句を大序とよび、これを衛宏の作とし、序の續伸の部分を小序とよんでこれを漢儒のつくるころとしたものであるが、その論證の一つとして、周頌の潛の詩の序に「季冬獻魚、春獻鮪」とあるのが、すべて『禮記』月令の文章であることを擧げている。またこの詩序批判では朱子にもその功を認めており、一概に反朱子學の見地から宋儒に論難を加えたり、敢えて異説を立てるようなことはしていない。

なお、この條の末尾に次のように言う。

小大序はもと皆な僞にあらず。後人、小序を以って子夏の作となし、大序を毛公の作となす。之に遵ふ者、儼として功令のごとく、敢へては寸尺も易へず。是れ僞書にあらず

『古今僞書考』補説(村山)

と雖も、實は亦た僞書に同じきなり。故にこれを此に列す。このようにして姚氏は先人の説に附會の多いことを明らかにするとともに、既成の權威に盲従することの愚を戒めてい

る。いま宋濂の『諸子辨』の序を見ると「諸子が各々私知を奮って大道にもとること」を批難しており、その「荀子」の條でも、荀子が孔子や孟子をそしっているのを責め、「韓非子」の條でも韓非子が孔子の道を罵っているのをとがめている。「四部正譌」も「穆天子」の條で「その文は淳古、宛然として三代の范型なり。蓋し周穆の史官の記するところ」と斷定している。こうした記述はこれらの書には多く見られ、古書に對する批判精神の高くないことをおのずから露呈しているが、僞書考の場合には「史類」や「子類」の辨僞においてもこうした安易さは見られない。例えば「穆天子傳」の條を見ると、

穆天子傳は左傳に本づきまた史の秦記の諸説に本づきて以ってこれをつくる。多く山海經の語を用ひ、その體制もまた起居注に似たり。起居注は明德馬皇后より始まる。故に漢の後の人の作たるを知る。また多く(竹書)紀年と相合す。亦た一人の作たるを知る。

とあり、論の當否は別として『四部正譌』にくらべて、立論の一段と嚴正なことが知られる。

以上の諸例から見ても、『古今僞書考』の先行書に對する優位性は明らかである。問題は、この優位性が何によつてもたらされたか、又、その辨僞の精神なるものがいかなる性質のものであるか等にあるが、それらについては稿を改めて論じたい。(以下續稿)

〈附記〉

小稿は筆者がかつて發表した「姚際恆の學問(上)——「古今僞書考」について——」(『漢文學研究』(7)、昭和34年3月刊)の補説である。『古今僞書考』論及び姚際恆論全般についての筆者の見解は、この舊稿と「姚際恆の學問(中)——姚際恆の境涯と學風——」(同上(8)、35年6月刊)、同上(下)——『詩經通論』について——(同上(9)、36年9月刊)、「姚際恆の禮記通論」(『フィロソフィア』45號、38年10月刊)、「姚際恆論」(目加田誠博士古稀記念中國文學論集)、49年10月刊)等を參看して頂ければ幸いである。